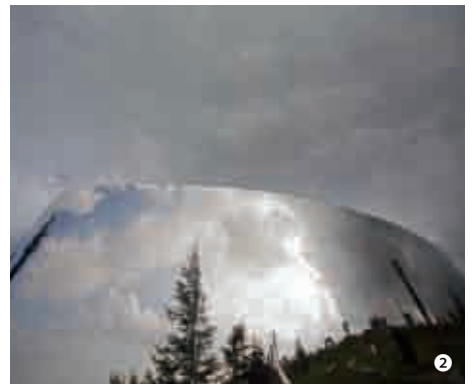


彫刻と建築の接点を探る

彫刻と建築を同位置に置いたものをつくりたい
取材／ASJ 静賀正樹 撮影／上田宏





彫刻と建築を 同位置で考える

彫刻。立体造形という点では建築に通じるものがあるのかもしれないが、それは似て非なるものだろう。アントニオ・ガウディやフンデルトヴァッサーのように芸術と建築を融合した例はないことはない。ある意味、ミース・ファン・デル・ローエのバルセロナ・パビリオンなどは建築である以上に美術品といってもいいかもしれない。

建築家・榎本康三さんはもともと彫刻家への道を行っていた。

大学は同志社大学経済学部。在学中に彫刻家の五里攻氏に師事した。

「こういつてはなんですけど、大学がつまらなくて、『モノ』をつくってみたかったんです。ひょんなことから五里氏と出会って弟子入りさせてもらいました」と榎本さん。

在学中に制作した「曲面における位相空間」という作品は、ヘンリー・ムーア大賞展で佳作賞を受賞する。

「ヘンリー・ムーア大賞展というのなら、そうそうたるメンバーが入賞しているわけですよ。そこにまったく無名の私が受賞したものですから、当時はかなり騒がれたんですよ。彫刻界に新星現るとかいつて」と笑う。

受賞作品は、現在「美ヶ原高原美術館」に展示されている。

ほかにも作品は神奈川県立近代美術館などに展示されている。

シロートではないのだ。

「建築家のOff Time」では、趣味を通して建築家を紹介しているのだが、これは趣味の範疇をはるかに超えている。

「現実的には彫刻では食べていけないですよ」と笑いつつ「そこで建築の道を選んだんです。彫刻と建築を同位置に置いたものができないかと考えていました」と語る。

たしかにはほかの彫刻作品とは違い、「曲面における位相空間」は単体のオブジェというより、空間性が感じられる。内側に入り込むことで彫刻を「体験」できるようになっている。

「やはり建築とつながっているんじゃないですか。彫刻そのものの創造というより空間をつくりたいというのが最初からあったのかもしれない」と榎本さんは語る。

建築はファインアートではなく、そこには生活をはじめとして社会的な営みがついてくる。

「私は、建築を彫刻にしようとは思っていないんですよ。同じように彫刻は建築にはなり得ない。ただ、その接点というのはあると思うんです。最初は自分の彫刻を置ける場所としての建築の提案だったかもしれませんが。だんだん彫刻と建築の融合みたいなことを考え出し『彫刻建築』というコンセプトを立ち上げました」。

榎本さんの設計する住宅にはどこかに必ず素材感のある材料が使われている。

一方、彫刻では金属やガラスなど、

- ①「曲面における位相空間」の前で作品の説明をする榎本さん。鏡面仕上げが施されたステンレスの曲面が空間を包み込む。
- ② 鏡面仕上げに周囲の風景が映り込む。場所によって写り込みが歪み変化していく。
- ③ 作品の前に立つ榎本さん。
- ④ 全景。曲面で囲まれているため、内部に入ると映り込みに全身が包み込まれる。

榎本康三

(東京都新宿区)

1955年京都府生まれ／1977年彫刻家・五里攻に師事／1980年同志社大学経済学部卒業／1981年ヘンリー・ムーア大賞展にて「曲面における位相空間」が佳作賞受賞／1982年第14回日本国際美術展にて「位相曲面 8:1」が神奈川県立近代美術館長賞受賞／1984年ムーデザイン事務所設立／1987年アルシブラン株式会社一級建築士事務所設立／1997年現代日本美術展にて「位相曲面 No.12 はがれた空間」が入選



できるだけフラットなものが使われている。

そこが榎本さんの中での住み分けになっているのかもしれない。